

■ 公開講演会

『あらよっと』の世界から日常の気づきを学びへ



2005年9月28日(水)
午後6時30分～8時30分
南山大学D棟

荒木孝司
(ソーシャルクリエイター)

【司会(津村)】：それでは、南山大学の人間関係研究センターの「秋の公開講演会」を、「social creator」の荒木孝司氏にお願いいたします。

この「social creator」というタイトルは荒木氏と二人で相談して付けた名前でもあります。今朝、東京から朝一番の電車で9時に名古屋に着き、一日かけてセッティングをしていただいております。そういったものも合わせて堪能していただけたらと思います。

講演会チラシなどの紹介記事の中にもありますので、あまり詳しい細々したお話は致しませんが、北海道で高校の教師をしておられたときに事故に遭って右足を失われました。そのあともさらに高校の教師を続けておられたのですが、南山大学の人間関係研究センターのTグループや体験学習との出会いがたくさんあり、今は米国に移られて、ポートランドで「school of social work」という資格を取ろうと頑張っておられます。

今回は「social creator」ということですので、写真なども展示しております。彼自身、このあと米国に帰ったら個展を開く予定でおられます。

そういう意味で、いろんなジャンルを駆け巡りながら、多くの人たちにエネルギーを与えておられます。それでは、荒木氏にバトンタッチを致します。

【荒木】：それでは、皆さん、こんばんは。アラキです。ここの教室(D51教室)でこういう形(全員が一重円に並んでいる)をとらせてもらうのは、実は3回目になるのでしょうか。最後にここを使わせていただいてからは、すでに4、5年経ってるのですが、すごく懐かしい思いで、今日は来ました。

早速で申し訳ないのですが、この部屋、入った瞬間に違和感があるでしょう。真ん中が誰も座ってなくて、なぜかズドンと開いていて、(お茶コーナーに)お菓子があるのに減っていないというね。

ちなみに、今日のお菓子のラインナップです。これはアラキのわがままで揃えてもらいました。まず飴の部から。パイナップル飴ですね。これはゆっくり舐めていって、最後の最後まで穴を残すというパイナップル飴。

それから、お菓子の王様と言っております、カントリー・マアム。今日は、カントリー・マアムの二つの味を準備してもらっています。これは凍らせてよし、それから電子レンジで温めてもよし、常温でもよし。いろんな食べ方ができます。不二家からデビューしてから、もう20年ぐらい経ちます。

それから、チロルチョコ、バラエティーパック。今回の新作、コーヒーフロート。これが今年の新作だそうです。これは一個しか入っていません。一個なので競争率が激しいと思うのですが。

あとは、雪の宿。これは口当たりが、めっちゃしょっぱい感じがするのだけど、後味が甘いんですよ。だから、一つのせんべいで二つの味が味わえるというのは、もう安い中でもNo.1ですね。

実は、雪の宿の他に控えの段ボールに、まだお菓子がガバァッと入ってますので、随時食べながら。そして、ゴミ袋が後ろにあります。分別するので、ビニル袋は緑の文字で書いてある方に、今日は入れてもらえると助かります。

チロルチョコだけ難しいです。上のセロハンの部分と中の銀紙とに分かれています。実はこの銀紙がすごく難しいんです。アラキがよく行く生田原という街があります。そこでは不燃ゴミなんですね。銀だから燃やせないということで不燃ゴミです。ところが、名古屋は、紙だから燃やせるというんですよ。すでにもう街で解釈が違うんですね。だから、チロルチョコはどこの街に行っても、すごく苦労するお菓子の一つです。ここ名古屋では、銀紙は、赤い文字（可燃ごみ）で書いてある方に入れてください。チロルチョコを取られた方だけ、その辺のことをご注意願います。

みんなでひとつの輪をつくる



ということで、ほぼ業務連絡は終わったのですが、で、どうしましょうか。このままで続けるのも……。教室の中に集まってきて来て欲しいのですが、入りづらいですね。

今日のアラキのタイトルは、『『あらよっと』の世界から日常の気付きを学びへ』と書いてありますが、少しずつ日常のことと学びということについての話を深めていきたいなと思っています。第1段階としてみんなで動きます。第2段階でちょっと絵というか、映像を見てもらいます。第3段階で、ちょっとしんみりして帰っていただくというような企画にしたいと思います。

で、今からこんなことをしましょう。これから使う道具なのですが、椅子一

つとペンを1本使います。ペンはどんなペンでも結構です。その二つだけを準備していただいて、これから全員で、この空間を使って一つの大きな輪を作ろうというのが、みんなのやることです。

それで、輪を作る条件ですが、昭和だとか平成だとかは無視して、自分の誕生日をちょっと思い出してもらえますか。何月何日だけで結構です。誕生日、忘れた方はいないですね。一応確認しておきます。

では、全員で輪を作るというのが、これからみんなでやることです。並ぶ条件は自分の誕生日です。1月1日から12月31日まで順番に並んでみませんかというすごく単純な条件なんですけれども、で、上から見てか、下から見てかは分かりませんが、時計回りになったり、いろんな並び方をすると思うのですが、それも今ここにおられる皆さんにお任せ致します。それで大きな輪をちょっと作ってみましょう。

それで、申し訳ありませんが、椅子を持ってる方は椅子を持って行くし、荷物がある方も荷物を持って、それは家財道具のつもりで持って、一つ大きな輪になりましょう。

もう動き始めてる方がいるのですが、一応ルールの確認をします。もう、分からないのだけどという方はおられますでしょうか。よろしいですか？どうやらいいらしいですね。

では、1月1日から12月31日まで、順番に大きな輪を作りましょう。どうぞ。

「輪作り中」

【荒木】：さあ、これでできたでしょうか。よろしいでしょうか？ それでは、1月の方はどの辺におられますか？ はい、ありがとうございます。ちょっと確認していきますので、自分の誕生日をちょっと言っていただけてますでしょうか。よろしいでしょうか。それでは、1月。

【女性1】：1月3日です。

【荒木】：3日。

【女性2】：11日。

【荒木】：11日。

【女性3】：11日です。

【荒木】：11。

【女性4】：13日。

【荒木】：13。

【男性1】：18日。

【荒木】：18。

(順に確認が続く)

【女性44】：12月3日。



【荒木】：3日。

【女性45】：23日です。

【荒木】：23。

【女性46】：24日。

【荒木】：24日。

【女性47】：24日。

【荒木】：できてました。ご苦労様です。

今、津村先生が心配そうに自分のところに来ました。あとから来た人は、どこに入れたらいいのか、ということで。これは意外とはっきりしていて、誕生日を聞けばいいのですね。そうすると、何月といった瞬間に、たぶん間に入れてもらうことができますと思います。みなさん、協力をお願いします。ということで、皆さんが入ってきたときの人数をザッと数えると、大体、50人ちょっとぐらいだったんですね。

この教室だと簡単に輪が作れるのではないかと思って踏み切ったのですが。誕生日順にただ並ぶだけなのですが、どういうわけか、どこへ行ってもそうなのですけども、1月生まれって、なんか集まりがいいですね。1月、ヤッターみたいなね。あれは何なのですかね。今日も見てたら、やっぱりそういう声が聞こえてきて、1月生まれどこかなあと思ったら、全員の方が手を挙げてくれて、すごく分かりやすかったですね。

それで、実はアラキ、これ400人でやったことがあります。400人だと輪を作るのはすごく難しいんですよ。その400人の内訳というのは、小学校・中学校・高校・地域の方たちです。大きな町の体育館でやったんですけど。じゃあ、生まれた月、日にちの順番で集まりましょうと。おそらく、12グループできるはずなんです。ところが、蓋を開くとどうやら多いんですね。ここが不思議なんです。

では、1月生まれのグループは立ってくださいといったら、1グループバーンときますよ。すごいなあと思うんですね。崩れるのは2月ですね。では、2月生まれといったら、2グループとか、5月といったら2グループだとか少しづつ崩れて、結局、400人でやったときには、18グループぐらいできました。

で、よく見ると、例えば、椅子の上に立って「何月何月！」と呼んでくれる人がいたりだとか、下にいてグルグル回りながら「何月何月！」と呼んでくれる人、それから、それをずっと観察しながら動いていく人。いろんな動き方があって、今、全員でやりきったのがこの瞬間です。

例えば、アラキは、これを学校や、地域の方たち、自治会の方たちの研修のときには、こういう言い方をするんですね。もし、何か災害だとかがあって、地域住民の方が体育館に集まってきたとき。たぶん、町内ごとに集まって人員確認をするんですよ。そういったときに、ワアッと動いたらどうなってしまうだろうと。たぶん、声の掛け方というのがあるのかもしれないというふうに、

気がついたのですね、ある時。

じゃあ、どうやったらいいのかなと思ったら、例えば、“アラキがはい、どうぞ”と言った瞬間に、どなたでも結構なのですね、“では、皆さん提案があります”みたいなね、“1月生まれの方だけ立ちませんか”みたいなね。それで、上か下かどちらかから見た時計回り、ということ提案すると、たぶんグループの動き方というのは全然違って来るんだろうなというふうに思うんです。

すごく簡単な、ただ誕生日の順に輪になるというだけで、ああ、そういうことを考えることができるなということを書いて、実際に、すごく大きな人数でやってみたのですね。そのときは、なんでそんなことを考えたかという、400人対して1時間で、1時間で、ボランティアの気持ちを育ててくださいというオファーだったんですね。アラキの返事は、「できません」です。1時間でボランティアの気持ちを育てることはできませんと。ただ、何か起こったときに、こういうふうに動いた方がいいのではないかというヒントは作ることはできるかもしれないですね。それで、考えた実習とふりかえりの仕方の一つのパターンなんです。

ちなみに一昨日、日曜日、運動会が台風でできなかったので、火曜日の授業を日曜日に振り替えた学校があって、その小学校4年生に、全く同じことをやってきたばかりなんです。小学生4年生、110人。そこでは、この実習、何分かかったかという、大体、6分ぐらい。すごく迅速でした。よく見ると、ちょうど運動会前だったということがあって、リーダーがいたんだな。そのリーダーがバァーッとみんなを動かして、すごくびっくりしましたね。常に動いているリーダーがいて、運動会でいつも指揮をとっているんでしょうね。その子が中心になってバァーッと作っていった姿を見たときに、やっぱり日常というのかな、日頃からやっていることが、何か全員でやるという明確なものがポーンとあったときに、何となく動けてしまうという瞬間を見せてもらったような気がするんですね。

だから、なんて言うんだろう、こういうことを、だからこういうふうにやるんだ、ではなくて、日頃やってることを応用できていける、こんなのが、ひょっとしたら、今求められている力なのかもしれないなというのを、この前の日曜日、ちょっと感じた瞬間でした。

それから、アラキ、一応、学校の教員だった時代がありまして、クラスの中で全員が関わらないとできないことというのをやっぱり目指すのですね。それで、クラス開きのときにやっぱりこういうことをやって。男子と女子、例えばクラスで輪になりなさいという、何が起きるかという、男子対女子の集団お見合いみたいな形になるんですよ。で、あれが嫌で、じゃあ、誕生日の順番に並ぼうという、初めてのクラスの子どもたちでも何となくやりきるというのがあって、クラス開きなんかでやったことがあります。

ということで、これは特に、皆さんからのふりかえりも何もないのですが。

では、これから、この輪を使って、さっきのペンを使って、面白いことをやりましょう。

で、ここからは、アラキはこの輪から抜けます。よろしくお願いします。
(荒木氏、輪の中に移動)

「あれ あれ あれ」

【荒木】：はい。ここで、もう一つ皆さんにお願いがあるのですが、どなたか1という発言をしてくれる方を一人募集します。どなたでも結構です。

その方に「1」と言ってもらって、そのとなりの方から、ずっと番号を言っていってもらおうということなのですが、どなたでも結構です。

(一人、立候補)

はい、ありがとうございます。

それで、これから、番号をずっと言ってもらうのですけれども。自分の言った番号を、覚えておいてください。その番号を、あとでペアを作るときのきっかけにします。

それでは、上から見て時計回りでいきたいと思います。

では、お願いします。

【女性1】：1。

【女性2】：2。

【女性3】：3。

(順に番号を言う)

【男性】：61。

【女性】：62。

【女性】：63。

【荒木】：はい、ありがとうございます。今、63人ここにいるということが分かります。よろしいでしょうか。

えーと、ここで1本のペンだけ準備していただいて、手に持っている荷物は、自分の座席の下に入れておいてもらえますか。

では、この1本のペンと、今から説明する方法で組んだペアで、これからやることを進めていきます。

で、これからやる実習は、アラキのコミュニケーションの、こんなところが原点なのということです、分かりやすく皆さんに説明したくてやるものです。タイトルが付いています。「あれ あれ あれ」というタイトルが付いているのですね。「あれ、あれ、あれ」のうちの今日は「あれ」というところだけやります。本当は3回続けていくのですが、時間がないので、最初の「あれ」ひとつだけやります。

それで、先ほど番号を言ってもらいました。皆さんは分かると思うのです



が、偶数番号の方。2で割り切れる方ですね。もっと分かりやすくいうと、2、4、6、8、0が付いている番号の方たちです。偶数番号の方は、自分の右隣の奇数番号の方とちょっと握手をしてみてください。

(握手)

【荒木】：はい。で、この方たちでペアになります。これからね。

まず、それでは、ちょっと練習なのですけれども、ペンを取り出してみてください。ありますね。どんなペンでも結構です。たぶん、今、ここにいる人たちは、両手がある方。皆さんは指ありますよね。ちょっと確認をしておきます。よろしいですね。

手と手のひらの間に、ちょっと挟んでみて。たぶん、簡単には落ちないですよ。ここでだれか落としてくれるとうれしいのですが。ありがとうございます。そう簡単には落ちないですね。

今度は、指先と指先ですね。どの指先でも結構です。親指と人指し指でしたら、はい、ありがとうございます。これはできますね。では、もっとトリッキーになると、こうやってやると曲がります。

これね、自分は、不思議で不思議でしょうがなかったんですが、体育学部、体育学科にいてこの謎が解けました。なんか目の錯覚で、錯視誘導と狭窄誘導というのがあるのですが、これは錯視誘導というやつなのかな。目の錯覚なんだそうです。それで曲がるのですね。はい、ありがとうございます。

それで、先ほどペアの方と二人で相談です。今度は、二人で1本を支え合うのですが、どちらのペンを使ったらいいかという相談をしながら、1本ペンを選んでみてください。どちらを使おうかって。

(相談中)

【荒木】：決まりましたでしょうか。1本が決まったら、一方で選考に漏れたペンが1本あると思うんですよ。選考に漏れたペンは、申し訳ありませんがしまっちゃって結構です。

なんか、やっぱりペンを選ぶときも、自分のペンがかわいかったりするとね、こっちを使いたい気持ちがあったりとかね。それは、あとでちょっと話をしますが、こういうペンを、今、皆さん、選びました。

ちょっと支え合ってもらえますか。



「ペンを支え合い中」

【荒木】：はい。支え合うことはできますね。では、ちょっと休んでください。ちょっと休んで結構です。で、支え合えることを前提して、これから進めていきます。

また全員でやることです。支え合ったまんま、どこでもいいですから移動して、今とは違うところに行って、また全員が同じ形で座りませんかという提案です。で、もし途中で支え合っていて落ちたりする場合がありますよね。そうしたら、また拾い上げて、そこから始めて結構です。

それで、全員でやることは、今から支え合ったまんま、どこかに移動して座る。ただし、これはなしです。立ち上がって、一人の人がタッタッタッタと180度移動して一緒に座るといのはなし。それから、二人で入れ替わって座るといのではなくて、できれば両隣ではなくて、どこかに移動して座っていた方がいい、これは面白いと思います。よろしいですか。

それでは、支え合ってみてください。それでは、どうぞ。

(ペンを支え合いながら移動中)



【荒木】：はい、休んで結構です。これで、これからやる実習ができるということが証明ができたので、練習が終わりました。ここからが本番です。

ところで、実はどこか空席が一つだけになってしまうと全員が座れないのですよ。気が付いて、一つ開いているところは皆さん詰めていただいたので、このように全員が座ることができたのですね。こんなふうにして、また全員に座っていただくのですが、いよいよ本番です。

まずは、何をやるかという見本を、皆さんに見てもらわないといけないので、二つのグループを募集します。どのグループでも結構です。直接、アラキから教えてもらえるというメリットがありますので、2グループ、パッと前に出てきていただけると。

もし、かち合ったら、奪い合うとか譲り合うとか、お任せ致しますので、2グループお願いいたします。もう1グループ。ありがとうございます。

それでは、各グループで支え合ってください。

(各グループ、ともにそれぞれペンを支え合う)



【荒木】：はい。支え合ってるグループが近づいてきて出会います。そして、実は空いている手があります。空いている手でペンを交換することができるのです。例えばこのように。

(お互いのペンを支えあいながら交換する)

【荒木】：もし、見えないぞという人がいたら、前に行って結構です。これは見た方がいいです。

(支え合いながらペンを交換中。終了して拍手。)

【荒木】：皆さん、お分かりになりましたでしょうか。大丈夫かな。それでは、2グループにもう一回拍手して、ありがとうございます。

それでは、今から全員で立ち上がって、ペンとペンを交換していきます。それで、2グループと交換したら座って待っててください。どこに座っても結構です。

どなたのペンが来てるか分からないのだけれども、とりあえずペンを持って待っていて下さい。よろしいですか。

たまに、ペンを交換しないで、ペアを交換していく方も、たまに出てきます。できればペンだけを交換してもらえばというふうに思います。

よろしいですか。それでは、やってみましょうか。

それでは、構えてください。いきましよう。どうぞ。

(全グループ、移動しながら出会った他のペアと、支え合いながら、ペンを交換)

【荒木】：はい、ありがとうございます。できました。ご苦労様でした。たったペン1本のことなんですが、結構ハラハラ、ドキドキしながら、いろんな方たちと関わり合いながらね。

一体これは何だったのかということなのですが。本当は時間があれば、お互いにやったペアの方と、"こんな感じだったね"と、とりあえずやり終わったあとの感想の言い合いってことかな。それで、面白いもので、一緒に支え合っているけど、思っていることが全然違ったりだとか、そういうときがやっぱりあるのですよ。——そんな交流の時間を、大変時間が短くて申し訳ないのですが、1分か2分ぐらい時間を取りたいと思いますので、せっかく一緒にやった方と自己紹介を兼ねながら、今やったことの感想の伝え合いってこの時間を取りたいと思います。それでは、どうぞ。

(グループでわかちあい)

【荒木】：それでは、よろしかったでしょうか。多分、これを放っておくと、ずーと話して終わると思うんでね、申し訳ありません、ちょっと切らせていただきます。せっかくなので、本当は全員から、うちはこんな話をしていたのだ

よという話をしていただけるといいのですが、——自分で本当にやっている実習のときには全部言ってもらおうのですが、今日は時間に制限があるので、1グループか2グループ、自分たちの話をしていたことを披露していただいて、その感想を言っていただいたあとに、飼い主の元にペンを戻さないといけないので自分の場所に戻ってもらって、自分の方でこの実習の意図と目的をお話したいと思います。

では、どこのグループからでも、どなたでも結構です。たまにグループで、いきなり、相棒だけがはいと手を挙げてしまって、一人おいていかれるときがたまにあるのですが、せっかくグループでやりましたので、ふたりからお話ししていただけると。どこのグループ、どこの方でも結構です。あれだけ盛り上がっていましたからね。“こんな話をしていました”、“こんな話題で盛り上がってました”と、関係ない話でも結構なんですけどね。どうでしょう。はい。

【女性】：相手の方が、すごい支え合ってるのは運命共同体みたいに感じたとおっしゃったんです。でも、私は全然感じなかったのですね。もうすごく申し訳なくて、私は全然感じなかったで、それがすごくびっくりしました。

【荒木】：結局、それを聞いて（ペアの人は）？

【男性】：ある種、夫婦みたいな感じだと思ったんですね。支え合うというか、一緒に共同で何か仕事をするというか、というような感じがあったと思います。

もっと思ったのが、こういう実習というのは、私はあんまり女性の方と近づくチャンスがなくて、そういうときに気安く、近づけるチャンスがありますよね。年齢を超えて近づけるというチャンスが、指示されるということで、すごく入りやすい良い実習だと思いました。

【荒木】：ありがとうございます。

すごくポイントをついてくれて、ありがとうございます。二人で思っていることが全く違ってやれる。でも、やりきってしまうことができるのかね。それから、会ったこともないし、性別も超えちゃっているし、だけど、何となくできてしまうという瞬間があったりだとか。これはすごく面白くて。実は、腕がなかったりかしても、ホッペタでできてしまったりとか、体のいろんなところで出来るのですね。

自分はそういう意味では、アイスブレイキング的な使い方というか、最初の導入部分で使うこともあるし、実はこれはすごく深いので、あとでお話をしますが、すごく掘り下げる学びの場の最初の場面だとか、確認の場面で使うことが、多い実習の一つです。

はい、ありがとうございます。すごく良い例でした。ありがとうございます。

あと、これを聞いて、あと一つぐらいは、皆さんの前で披露していただけると嬉しいのですが。はい、では、お願いします。

【男性1】：実は我々以前に知り合っていて、久しぶりにお会いしたんで、顔は知り合っているんで、いいかなーと思って歩き始めたら行けない。おんなじ

方向にいけるのかなーと思っていたんですがやっぱり行く方向を確認しあってから行動せんとあかんと後で反省いたしました。

【荒木】：相棒の方は？

【男性2】：センターの講座で一緒になって知っていたせいか、話し掛けやすかったし、だから、あっちと言えば通じるかなと思ったら一言もなく、もし知らない同士だったら、あっちってどっちって訊けたけども、下手に知っていたばかりに、なんだか確認せずに行っちゃったかなというようなところがあったかも知れません。



【荒木】：ちょっとした油断、かな。

【男性2】：油断というか、甘えというか。

【荒木】：はい、どうもありがとうございます。これ、たぶん全部聞いていたらすごく面白いと思うのですが、時間も時間なのでここで止めてしまうんですけども。

では、飼い主の元にペンを戻しながら、自分たちの最初に座っていた場所に移動したいと思います。よろしくお願いします。はい。

(交換したペンを持ち主に返して、最初の席に戻る)

【荒木】：この「あれ」という実習は、どこで思いついたかということなのですが、実は体の不自由な子どもたちとそうではない子どもたちが、一緒にできるインクルージョンという実習があるのですけれども、そこでいろんな遊びがあるんですね。その中で、いろんなものを支え合ってみんなで遊ぶという、ただの遊びなのですが、そこからヒントを得て、考えた実習の一つです。

自分は学校の教員をやっているときは、外を歩いて、みんなで枝を拾わせるんですね。ただ、枝を拾ってみんなで遊んでるのですけれども、それから支え合うということになると、例えば、柔らかい糸スギみみたいな枝を拾ってしまうと難しいのですよ。今度は、ささくれ立ってるようなやつでやると痛いというので、そこで二人で支え合うという目的ができたときに、初めて、支え合うためにはどんなものがあるのかという共通認識が湧いてきたりするんですね。

そして、支え合うということから、それを相手に渡したりだとか、受け取ったりだとか、当然、途中で落としたりするわけですよ。ところが、二人の関係が壊れても、また拾い上げるという努力することによって、また支え合うことができるという。

つまり、自分たちが日常の中で、いろんな関係の中で支え合いながら生きていて、たまにくじけたりだとか、失敗してつまづいたりするときに、ポトッと落ちる瞬間というのは結構あるんですね。そのときに、サッと拾い上げていて、そういう努力をしているのか、ちょっと逃げてるときがあったりとか、ちょっ

と努力するまでもうちょっと考えてみたりだとか、ということをつくさんして
るのかもしれない。それで、我々というのは、多分どんなことにつまずいても、
ひょっとすると拾い上げるという努力をすることができる。そういう生き方を
どこかに常に持っているのだというようなことを感じたくって、知ってもらいた
くって、こういう実習をちょっとやってみたりだとか。

もう一つは、自分たちの支え合ってる関係。相手に渡すこともできるし、受
け取ることもできるわけです。そして、相手に渡したものはどこに行くか分
からないですね。どんどんいろんな人の手を渡っていくし、自分たちの手元に
来ているものも、いろんな人たちの思いをつなぎ合わせて届いているのですね。

だから、本当はこのあとに、ゴム風船と紙風船を使って同じようなことをや
るのですが、紙風船なんかをやっても最高ですね。もうグチャグチャになりま
すよ。途中で息を吹き込んでだめだという条件を付けるのですね。そうする
と、やっぱり潰れないように、なぜか空気穴を塞ぎながら相手に渡そうとする
のですが、相手には空気穴が渡りませんので、結局、指と指が紙風船の中で付
いてしまったりするのですが。

振り返りをすると、やっぱりグチャグチャなものを相手に渡したくないし、
グチャグチャなものはもらいたくないのですよ。潰れたグループが来たら逃げ
ますからね。あれはもらいたくないと。

だから、たぶん日常の関係でも、やっぱり相手に対して、すごくパンパンの
気持ち良いものを渡したいという思いはどこかにあるのですね。やっぱりグチャ
グチャなものは受け取りたくない。

では、逆の発想になると、自分たちの方からグチャグチャしたものを渡した
くないから、日頃どんなことに気をつけたらいいのだろうというきっかけにな
ればいいなあということで、「あれ」という実習をやっています。

これは、小学校の低学年からもできるし、お爺ちゃんお婆ちゃんたちでもす
ごく楽しくできる。お爺ちゃんお婆ちゃんたちなんかは、さっき言ってくれま
したよね、男性と女性が話すきっかけになるというね。お爺ちゃんお婆ちゃん
たちはまさにそれです。すごく照れ屋ですから。ところがそれをきっかけで、
結構盛り上がりたりするのですね。だから、時と場合によっていろいろな使い
方ができます。

例えば、自分は企業人研修でやるときは厳しいです。落としたらね、落とし
た瞬間に、輪から出てくださいと。結局、お客様との関係をそんな簡単に崩す
ような集中力では困りますと。そんな集中力ではちょっと困るんで、もう出て
くださいとね。だから、フォーカスを変えると、こんな使い方もできて、結構、
面白いゲームの一つです。

ということで、前半は終わりです。

では、早速、10分間の休憩に入りたいと思うのですね。たったこれだけだけ
ど、多分、かなり集中力を使ってるんですよ。そのために飲んで食べていただ

いて、血糖値を上げていただいて。

ちなみにこの花ですが、卒業生の方が、今日のアラキをイメージして作ってくれたんです。講演に来る方をイメージして必ずこうやって生けてくれるのだそうです。あれがアラキです。なんか、すごく嬉しいのですが。今日は、黄色と赤の、今日のアラキの服のようなカラーリングで、まさに作っていただきました。

あの時計で45分まで休憩にしたいと思いますので、よろしくお願い致します。それでは、ちょっと休憩です。

写真をみながら



【荒木】：それでは、45分になったので、第2部に行きたいと思います。

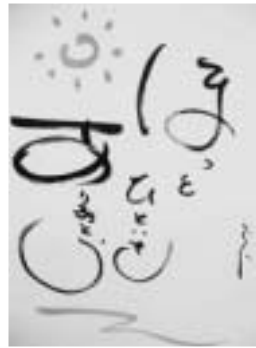
えっと、第2部に入るんですが、ちょっとした映像を見ていただきながら、今、アラキの考えていることだとか、何をやりたいのかだとか、一体あれは何をやっている人間なのかとか、いろんな疑問があるかと思っていますので、そういう話をしながら進めて行きたいと思います。

たぶん、これが自分の椅子になるのかな。ちょっと、こんな感じでお話をしたいと思うんですよ。それで、椅子が邪魔な人は置いておいて、体一つで来ていただければいいし、椅子があった方が楽なんだという人は椅子持って来ても結構ですし、近くまで来ていただくと助かります。なんか、町内会のカラオケ大会みたいで。

「Social creator」という名前ですが、実はアラキ、肩書きがないんですね。で、今までどんな肩書きでやっていたかという、文科省から話をいただいてもですね、アラキの肩書きは、太陽系第3番惑星、地球所属という。文科省の仕事をしているとですね、講師陣に、なんたら大学何々教授ってバァーっとあるわけですよ。するとポツンと太陽系第3番惑星、地球所属 アラキとね。で、なんだろうってみんなから言われて。ああ、あなたが太陽系第3番惑星地球のって、いや、あなたもですからってね。そういう切り返しをやっていたんですが、それも、そろそろ限界があるだろうと言われて、じゃあ何か言葉作らなきゃと言われて。

で、実は先程ちょっと案内があったんですが、アラキは、「school of social work」と言って、スクール・ソーシャル・ワーカーというのがアメリカではもう百年以上の歴史で行われています。これ、やっている州と、やっていない州があるんですけど、いわゆるソーシャル・ワーカーの学校版というのかな、学校に関わる親だとか、それから子どもさんもそうだし、先生方もそうだし、地域の人たちもそうだし、そういうことに関わっていく専門家たちなんです。

それで、そういうのを勉強したくて行っているんですね。



で、一方、写真が飾ってあるじゃないですか。写真を撮ったりとか、絵を書いたり、書を書いたり。「今日の出会いにありがとう」とか「ホッと一息ありがとう」というのは、アラキが研修会場に必ず掲げる言葉なんですけど、今日皆さんに会えるからこそ、みんなが、例えば、64人いれば、64通りの学びをしてみんなが帰って行けるという、それにすごく感謝したいという気持ちと、はじめの時の雰囲気とはまったく違った、何か一つやりきったという後での、お茶コーナーのような、みんなワット群がっていける場所というのは、すごくホッとするひとときなのかなって思ったりしてね。そういうことをやっていて、何かを作り出していく、と。

実は、自分は体育系、国士館の体育学部体育学科なんですけど、その体育学科を出た後、北海道に帰って教員をやりながら、教育大学の特設美術も取ったんですね。3年間大学通うんですが、教員になった一つのきっかけというのも、未来を創造の最先端が学校というふうに使っていたわけですね。教育が未来を作るところで、その場に身を投げようということ。



自分はたまたま陸上競技の110メートルハードルというのをやっていた。たまたま国士館にその110メートルハードルの日本の第一人者で、渡部近志という——オリンピックの強化コーチをやっている方なのでどっかで名前を見る機会があるかと思えますけれども、——彼がいるところに行こうということですね。で、陸上競技の中でいろいろなことを学んでいった一人です。

その辺のことを話すと非常に長いので、割愛しますが、中学生くらいのころの話をする、ただの不良がですね、行く高校がないと言われて、看板屋さんの丁稚として就職が決まっていた。で、父親が通知票を全部破って捨てました、もう必要ないと。でも、母親がそれを一つ一つセロハンテープで張り合わせてくれて、そのボロボロの通知票を見て、じゃあ高校一校くらいは受けよう。で、行きたい高校が一つあったんで願書を出しました。

ところが、受験票がですね、全然違う学校の受験票が来るんですよ。どうしたんだろうと思ったら、副担任が出てきてですね、おまえはあんなところ受かるわけないから、全部書き直しておいた。これは、公文書偽造です。とりあえず、そこを受けに行ったら、奇跡ですね、450人中、448番で受かったんですね。もう引っ掛かったというのが正解ですね。

で、クラスで当然、当時45人学級だったんですが、Mさんというやつが45番。自分は44番でね。二人で後ろを支え合っていたんですが。でも、友達が目の前で亡くなるという、非常に悲しい事件があり、生きているならなんか自分ので

きることを、ということで今に至るんですけれども。それで、教育だったんですね。それで、いろんなものを作り出していき、それからソーシャルワークという一面。

で、日本でソーシャルワークというのは、実はなかなか馴染まないんですね。ふっと気が付いたら、これはアラキ的な解釈なのですが、自分がアメリカで住んでいて肌身で感じたということでお話をするんですが、アメリカというのは多分、開拓史の時ですね、教会を建てて、教会のまわりに町を作っていたという歴史があるんですね。で、何かあったら、町の中心、教会に集まって来るというのかな。

で、そこで、ソーシャルサポートという言葉があるんですが、お互いに支え合っていくという。日本でいうと、昔は神社やお寺があって、農繁期は忙しいんだけど、何かあれば寺に行ったりとかね、神社に来てという。そういうシステムだったんですけど。そこで、いろんな国の人たちが流れ込んできたもんだから、何かルールを作らなければならないと。それで、アラキは、最近はどう思うんですね。ルールというのを日本語に訳したらどういう言葉になるのかと。どうですか。皆さんの中でピンとくる言葉はありますか？ ルールを日本語に訳すところという言葉が当てはまるという。これがなかなかね、ルールを説明するのは難しいなあと思った瞬間があって、今は自分なりの言葉を使っているんですけれども。

結局、みんなが生きていく為に、ある一定のルールを作って、そのルールを守りながら、社会が成立しているんですね。その時に、働く人たちがいろいろとサービスという言葉を使いながら、間をとりもってきた。それで、アラキは、みんながより良く生きていくためのルールというのをこんなふうにいるわけです。みんながより良く生きていくための知恵というふうに訳しているんですね。その知恵をみんなで出し合って、だからこそいろんなことをやって前に進んでいく、作り上げていく。

それで津村先生の方から、おまえいろんなものを作っているから、クリエイターというのはどうだって言われたんですね。すごくピンときて「あっ、じゃあ“social creator”という言葉、いいじゃないですか」と。

それは、アラキが「social creator」ということもそうなんだけど、実は、その裏には、ここにいる皆さんもそうだし、皆さんが関わっている方たちも、あなたがいるから実は社会ができているという、あなたも「social creator」の一人ですということですね。そんな言い方ができるんじゃないかと思って「social creator」という言葉をどんどん使っていこうかなというふうに思いました。

それで、南山さんの今回の案内の中にもその言葉を載せていただいて。実は釧路市で、今年の2月、3月に行なったんですけど、そこで初めて「social creator」という言葉を使って、皆さんも社会を作っている一員ですよという形で、自治会にいる方たちの研修会で使わせていただきました。そこから始まっ

て、今、少しずついろんなところで語りはじめています。

で、言葉の意味なんですけれども、少し紐解いてみると、誰かがいてくれるから社会が成り立っているんだというね、どこかそういう日常というものを忘れてはいけないなというのが自分の中にはあって、なぜ、そういうことを痛感してきたかという、学校の教員をやっているときに、こういうことがありました。

教育相談を勉強する人たちが集まって、教育相談研というのがあるんですが、そこで何回か自分が企画したものをやりました。

例えば、ある子どもが昼休みが終わった後に、廊下で座って泣いています。その時に、先生たちはその子を見て、どんなふうに思うかちょっと考えてみてくださいと。

自分は驚いたんですが、その時にそこに来ていた先生方、40人ちょっといました。今いるよりもちょっと少ないくらいです。で、すごくザワツとしたんですが、その時の答えが皆さんほとんど一緒だったんですね。

で、答えは、どうやら昼休みにいじめられて泣いているらしいという答えだけだったんですよ。それで、そのあとにどうするんですかっていったら、専門の先生にとりあえず相談するという。そこからちょっと個人差が出てきたんですけれども。ああ、そんなふうに見ちゃうんだと思ったんです。

まあ、確かに、前提のない事例なんですけど、もし日常的に、子どもたちといろんな関わり合いを持っていると、とりあえず、まずどうしたんだろうと思いつながらぬ、近づいていくとかね、とりあえず、よく分からないけど、横に座ってみるとかね。なんかそういう答えが一つ二つあってもいいんじゃないかなって少し期待していたんですね。

ところが、いじめられて泣いているという答えを書いた人が、実は100%だったんですね。こういうことの勉強のために来ているからそういうふうにしたのかということとはそれは分からない、読み切れないのですけれども、その時に、あっ、何かやらなきゃ駄目なんだろうなあっていうのは、漠然と思いました。

それが、たぶん自分が31くらいの時で、足を無くして一年目かな。その頃から、南山さんの研修だとか、プレスタイムさんの所だとか、そこで前ここにおられた星野先生の研修だとか、そういうのに出るようになってから、ああ、やっぱりこういうことはちゃんとやらなきゃって。

でも、残念ながら、そういうことをどうしようかなって思っていると、何かワークという一つの形があり、それをやっていたら子どもたちがこういうふうに動きますというコントロールするところを走った人たちがいて、どうしようかなと思いました。

じゃあ、もっと分かりやすい何かをやっていたらいいんじゃないんだろうなと思った時に、ソーシャルワークっていうのが一つ頭にあったから、じゃあ、学校というところを一度離れて、いろんな世界から物事を見て、いろんな方たち

に、こういうことを、自分は幼稚園から、一番上は88だったかな、の方たちまで関わるんですけども。

一番症状の重い子は、こういう場にストレッチャーに乗って、点滴ぶら下げて、看護婦さん一人付いて来ましたがね。何もできないんですけどもここに來ることが喜び。それで、参加していいだろうか？ と。まあ、いいんじゃないですかと言ってね。そういう形で来てくれてすごく嬉しかったんですけども。

それで、もっとみんなに日常というものをフッと振り返ることって何かないかなあと思ったときに、例えば、自分は写真をやっていたりとか、絵をやっていたり、書をやっていています。

写真というのはひょっとしたら、これから面白いかもしれないということですね。陸上競技の中では、審判員っていたんですが、アラキ、写真判定員だったんですよ。あの走ってくるところをカシャって撮ってね、一着3コース、11秒11とかね。こんな感じで読んでいたんですね。あれは、一人の人が時速10キロで走ってくると、フィルムを時速10キロに逆走させるんですよ。そして、1ミリのすき間から入ってきた光をこういう風にとらえていったら、人の形になるんですね。すごく面白いシステムなんですけども。そんなことをやっていて、写真という表現はちょっと面白いかもしれないと思って、実はインターネットで、一日一つの写真に一つの詩を書いて、毎日アップしていたんですね。今現在一年以上撮っているんで300枚以上、で、ある時、それを見に来ている人たちの中で、本にしたらいんじゃないかと。中には切手にしたらいんじゃないか、カードを作ったらいんじゃないかといろんなことを言ってくれるんです。

そうかって、それで本を書いたのが「あらよっと」という本なんです。あそこには、一枚の写真と、——自分は、写真を撮りながらその情景というか世界観というのが印象に残るタイプだということに後で気がついたんですが、同時に詩が出てくるんです。詩と写真を続けながら、これはちょっと面白いかも知れないと。

それから、絵というのも感覚的に描きます。角度を変えると見え方が違ったり、想像をかき立てられたりします。

それで、最終的にアメリカ人の目にかかったのが写真だったんですよ。彼らは写真だと、当然英語圏の方たちなんですけど、同じような見方でなくていろんな見方をしてくれて、ああ、これだと日本でもアメリカでも、共通にできるなということで、今年は写真にちょっと集中している。

で、アラキの撮っている写真のほとんどは、ここが売りです。アラキの住んでいるアパートの半径15分以内なんです、歩いて。だから、写真家の友達がいるんですけど、そういうやつがいるから困るんだよな、みたいなね。その瞬間を撮るために、もうずっとテントにこもって、何日間もその瞬間を撮り続け

るという人たちもいるわけですから。アラキが生活の中で、今年の春から実際に使っているカメラはこれなんですけど、これを持って歩いて、歩きながらこう撮っているんですね。シャッター切るんです、ほとんど覗かないんですよ。

例えば、この3枚は撮っても覗いていないですね。これ、うちの裏です、アパートの。ポートランドのね。下からただあおっていったらどうなふうに写るかっていう。でも、注意するんですよ、自分が写らないように引いたりとかね。すると、こういう写真撮らせてくれるんですね。

これは実は、毎日自分が降りていくアパートの階段の下に生えているタンポポなんですけど、すごいなあと思ってね。かっこいいタイトル付けたりですね。「愛と平和と勇気」というタイトルがついてるんですが。これは、色の加工とか何にもしていないんですね。このまんま撮れているんですよ。それはたぶん、気象条件だとか、使っているレンズの条件だとかがあるんでしょうけれども、それは自分が撮らせていただいているなっていう感覚があるんで。そんな日常のちょっとした瞬間というのは、すごく大きな学びに繋がっていくという。



これは遠くの人には分からないと思うんですが、実は線路で花咲いているとんでもないやつですね。この子はですね、アラキが三年間見続けてきたデージーかなんかですね。白い花が咲くんですけども、三年間かかって、やっと花咲いている瞬間を見ました。ここが線路でしょう。で、ここ引き込み線だから、週に1,2回は電車通るんですよ。路面電車が。だから、すごく難しい条件の所を選んで、わざわざその子は咲いているのね。で、葉っぱがピンとしている瞬間ってのもなかなかないんですよ。

それで、この日は朝8時14~17分の間ですね。通りかかったときに咲いている、やったじゃんって思った瞬間にもうシャキッと切って、これのタイトルが「Yes」というタイトルなんですけど、もうこんだけでYes、Yesと答えてて、言ってて、嬉しかったですね。だけど、夕方にはもう蹴散らされてしまいました。ちょうど人が通る歩道にもなってるんですね。それでも咲こうとしている、それを見たときに、生命力だとか、ちょっとくじけそうな自分とかを励ますだとか、なにげに毎日歩いている風景の中に、たくさんドラマがあるんだと。

で、写真たくさん撮っていてネタ足りなくなるでしょうって言われるんですけど、毎日違うから、無くなることはないんですよ。発想としてはね。だから、毎日楽しいですね。



それで、この写真だけ何故ここにあるか不思議でしょ。これ、最後、アラキとジャンケン対決して勝った人にプレゼントしますからね。だから、ここにあるんですね。ちょっとお楽しみを残しておかないとね。この写真は、下の所に水滴が入って汚れちゃったんですね。で、売り物にはならないんでね、じゃあ、今日ここで、プレゼントしてしまおうってね。汚れはちょっと

だけなんで、ほとんど変わりません。そして、実は、もう一つこれには目的があって、後ろのコンピュータを隠すっていう目的があって。

(コンピュータからテレビに映像を映写)



これもその「Yes」というシリーズの一つなんですが、これ、すごく嬉しかったのは、ここ壁で、これ、工場の倉庫跡地なんですよ。そして、こっちも何もないんですね。

で、これ茎が倒れているんですが、根っこがですね、路上にもうむき出し。そして、ここ日陰なものだからひよろひよろひよろって、それでもパッとね。すごいですね、何メートルですかね。1ブロック分の大きい倉庫があって、その倉庫のど真ん中に、これ一輪ポーンですね。足が止まってしまうですね。そこは、アラキのお世話になっているアートディレクターの方がいるんですが、その方の事務所の倉庫のへりで、そこ、いつも通っているところなんです、花なんか咲いているところ見たことないんですね。たまたまこの子がポーンと咲いていたんですね。



これ、残念ながら、どこの国でも同じですね。たばこのポイ捨て。

これですね。どうしてもこういうところに出てくるんですね。

ここは野球場です。イチロー選手も来てプレーしています。春の練習の時にね、ここは大リーグができる球場ではないんですね。アラキはここから徒歩1分半のところに住んでいます。この近所なんですけれども。

この子もそうです。ダーッと赤いブロックがあって、赤いブロックの一區画に一つだけポツンとね、どこで見つけるのか分からないけど、咲いてるんですね。ああ、すごいなあって。

実は、この子たちというのは、日がパァーっと差していて、必ず日があたる時間があるんですよ。そのところに向かっていっているっていうか。

それで、これ撮っていて何を一番感じたかという、やっぱり温かいものとか、触れていたいものがあるとすると、それに向かって行けるエネルギーというのがいろいろなところから湧き上がってくるんだらうなということです。



これは、アラキです。影ってすごくおもしろくて、自分じゃないですか。光がないと影ないんですよ。影がないっていうことは、光がなかったということですよね。で、これ、夜8時半くらい、夏なんですごく明るいんですね。夜8時半くらいでもこんな光で。これ、どうやって撮っているかという、カメラこう構えて、自分は向こう見ているんですね。こうやって。で、ちょうどこ影になるように、こう持ってね。シャッター切っているんです。

あともう一つ、自分の特徴としては、義足の影が、皆さんには違和感になると思うんですが、なんとなくね。自分と話をしたい時とかあるじゃないですか。向き合うときに、自分はね、影を使うことが多いですね。自分の影とちょっとお話をするという。表裏一体というか。日が高ければ近くにいるし、光がこっちにあるとこっちに伸びるしね。そういった大切な存在の一つですね。



これは線路の信号機。これが普通の信号機、車の信号機。これが交通案内、これが電気です。この子が出没するのは、6～7月の午後6～8時の間に出没します。ここも、毎日通っている道なんですね。さっき言った「Yes」っていうのは、こちら辺で咲いているんですね。すぐ横なんですけど。

毎日歩いている道だと、影の出方までインプットされていて、それがね、これ「モンスター」というタイトルを付けてるんですが、なんかウォーって出て来ているんでね。で、これはもうこの季節は見れないんですよ。その季節のその瞬間に現れて来るものもすごく、日常の中のキラリかな。



これは、どうですかね。たぶん、ちょっと名古屋に例えると難しいのですが、例えば、名古屋城みたいな感じですね。街のど真ん中にある雑草なんですね。ちょうどここに太陽があって、街のど真ん中。“どこの山奥に行って撮ってきたの”、と聞かれるのですが、“いやあ、これ、どことこの地区だよ”って言ったら、やっぱりみんなびっくりしますね。

つまり、物を見る角度っていうのかな、よくアラキは中心性の理論というんですが、地球は目に見えない力に包まれているじゃないですか。引力っていうのかな。引力って、地球の中心に向かっていっていると思うんですね。で、たぶん体の中心というのがその引力に引っ張られて、世界中のすべての物と人がその引力の中心の一点で交わっているとアラキは思っているんですけども。それで、たぶん、そういう大きな空間の中で、一つの中心があって円があるとすると、その切り口の断片というのは、たくさんの視点があって、どんな見方をしてもいいんじゃないかと、自由な発想というのかな。

で、今アラキが撮っている角度というのは、自分で見ようとするときすごく難しいんです。ところが、カメラって面白いもので、例えば、地面だとしても、自分の目だとかやっ行って行けないんだけど、こうやって見せてくれるんですね。そうすると、ああ、なるほどって気付くことに繋がっていくという感じでね。

その瞬間に、いろいろなことがひらめくんですよ。ああ、こんなものがあつたら、こんなことができるじゃないってね。結構、そういう思いが出てくる写真でもあります。

これも街のど真ん中なんですね。今は工場が倒れて住宅地になるんですが、まあ、こんな写真がたくさん続きます。

これ、アラキの手ですね。



これは、三部作。これ、コマーシャルなんですけど、この三部作、アメリカで大々的に、1,080組作ろうという企画で今動いています。で、来月、再来月と立て続けに個展を開くんですが、そのメインになります。

これ「natural」といって、安いですが、三つで1万円。頑張りました。というのは、フレームって、高いんです。それで、探して探して、やっと一軒ニューヨークの業者ですごく安く買えるところを見つけたんですね。そこから大量購入ですね。ガラスを使っています。紙はドイツから買っています。アメリカの業者を通してね。そして、プリンター。日本の誇るエプソンです。アメリカの商品なんですけど、日本名のと違うんですが、エプソン。で、Mackintosh。それと、あとは、AdobeのPhotoshopというソフトで現像をしています。

これは「勇気」というタイトルで、実はこの中で、これはアラキの一番の好みですね。これから旅立とうという勇気と、それから、これから咲こうとする勇気と、まあ、いろいろな勇気があっというんじゃないかということもポツと言ってくれているんですね。実は、これを撮影しているときに、アパートの管理をする人が、お願いしてタンポポ刈り取る人たちが来るんです。で、その辺を全部きれいに刈り取っていくんです。雑草の駆除ということですね。

で、これを撮影している間にその人たちが来て、何撮っているのって言われて、いや、写真ですという話で、こんなの撮れているんだよねって。あっ綺麗だねって言って、その場でアラキのカード買っていききましたからね、その人たち。一人が二枚買ってくれたんですね。で、ごめんね、これから刈り取るからって、そういうコミュニケーションがあっただけね。



実は、これを見た15分後には、この子たちはもう旅立つことなく、お別れ。ああと思いつつね。でも、一年後の5月、6月、7月、また同じ場所で咲いているんですね。その時にまた、お帰りって言って会うんですけども。

だから、本当にこの三部作はもうギリギリですね。白くなりかけの瞬間に刈り取りに来ますから、そういうタイミングでないと、実は撮れないんですね。去年もやっと一枚撮れたんですけども。そういう思いもあるんでね。



で、これを綺麗だって言っているんだけど、逆にガーデニングをする方たち、どうやらタンポポは敵みたいです。ウワー綺麗なんだけどねーって言いながら、一枚買うって言うんですけど、でもあったら速攻で刈り取るよねって、たぶんね。まあそんなもんなんだなってね。

だから、日常生活に密着している部分と、また角度を変えて

見たときに、ギャップというのかな、すごく面白いなと思うんです。

だから、たぶん、毎日、通っている道がもしあるとすると、そこを歩いて、毎日表情が違うというのがすごく楽しくて、だから、アラキは朝出掛けるのがすごい楽しみになるんですね。で、朝日が出てくる瞬間というのも大好きで、アラキの楽天日記を見た方は分かると思うんですが、いつ寝ているんですかという世界でね。夜明けのときと、当然、夕方のこと書いているし。常に天候のことを書いてますね。

自分は、自称お天気お兄さんって言っているんですが、朝の空気が変わっていく瞬間、気持ちが良いものですから、外に行ってラジオ体操とかするんですね。一応体育の教員なんでね、いい気になって小走りなんかして、そして足を怪我して、血だらけになったりとかね。ほんとにもうなんかもうグチャグチャなんですよ。それでも、なんか外に行って体を動かすことをやって、そうすると、なんか一日がすごく楽しく過ごせるというか、いろんな人とコミュニケーションをとれる。

で、面白いもので、毎日同じところを歩くわけでしょう。毎日カメラを持って、同じスタイルで。アラキ、着る服が大体5,6パターンしかありませんので、毎日ローテーションですよ。だから、一週間に2回は必ず同じ服を着ているんですね。

で、いろんな人に呼び止められますよね。何やっているのって言われてね。いや、こんなことやっているんですって。これは驚くことなんですけど、ハガキみたいなものあるじゃないですか、カード。あれ、デモンストレーション用で、300枚最初作ったんですよ。それで、毎日持って歩いていて一週間で300枚、呼び止められて売れましたからね。

別に売り込んだわけでもないのに、ただ持って歩いていて、“何撮っているの”って、“いや、こういう写真なんだけど”、“これいいね”って言って、“いくらなの”って言われて、“いや4ドルだけど、3ドルでいいよ、今日だけ”みたいなね。だけど、買っていってくれるんです。ああ、なんか言葉はなくてもいいんだなあって。

“実は、ここね、レストランの前で撮ったんだよ”だとか、“実はここなんだよ”だとか言うと、みんな喜ぶんですね。“ああ、うちの前にこんなところがあったんですか”という。



それで、毎日、一日一回は必ず自分のうちのアパートの前の空を撮っているんですが、不思議なのは、“あっ、これはいつの季節の空です”って説明できちゃうんですね。そのくらいずっと、ポートランドへ渡って、住み始めて4年くらい経った。そして、ちょっと振り返ったときに、自分が教員時代ね、そういうところまで目がいつかいたかなと、ちょっと反省も含めながらね。もっともっと、自分たちの日常のキラリっていうのを発見すると、生活っ

て豊かになるんじゃないかなって、そんな気がしています。

それで、自分のやっていることのほんの断片が、そんなきっかけになったらすごく嬉しいなっていう。これが通じて「あらよっと」の世界に絡むんですね。ホント特別のことではなくて、本当に歩いている、ほんのその最中。でも、ちょっとだけ、トリッキーな写真があって、アラスカ上空で撮った写真があったりだとか、あとは北海道で撮った写真がちょっと混じっていたりだとか。あと、どこだろう。富山県上空辺りで撮った写真があったりだとかするんですが。でも、それも、自分が動いている最中のほんの一コマという撮り方ですね。



ギターの演奏と歌

で、よく人間関係の話をするときに、必ずアラキは、この音叉を取り出します。これ、ご存じですかね。よく理科の実験で使ったり、それからギターのチューニングをしたりするんですが、これ、聞こえるかな、みんなに。

こんな音がするんです。440Hz。Aの音なんですね。C,D,E,F,G,A,B,CのAの音なのかな。で、これすごく面白くて、実は、これ錆びていないでしょ。きれいでしょ。これ、中学校2年生の時から、アラキの筆入れに入っている代物です。なんで持っているかという、当時、ただの不良だったんですが、その時に、なぜかいろんなことを考えていたんですね。この音叉というのは、実は、こうやっている分にはずっと音が響いているんですよ。ところが、片方、止めちゃうと、音止まるんですよ。まあ、理科の先生に言わせると、当たり前だと言われちゃうんですが。

でも、人間ということを考えてときに、人間って、人の間って書くじゃないですか。で、人の間で、いろんな心が生まれるとかえって人間性が育つというのかな。で、常に人間性って言葉は、人と人との間で心が生まれるから人間性って言葉があるというふうにはアラキは思っているんですけども。で、みんなが響き合えるから学び合える。ところが、響き合わないとなんか音すらしない。

でも、そのときに自分はね、ああ、なんか人間くさいなって思った瞬間があって、どうせなら、ずっと響いていたいなという思いが中学校2年生の時に。よっぽど辛かったんでしょうね。だって、金髪に染めた女の先輩が、バーンってその辺の男子ブン殴ったりしているようなとこだったんで。で、これは、自分のいろんな人間関係を語る、ホント、ベースになっている一つですね。

そして、もう一つ思い出があって、先程出てきた、死別した友達。15歳でね、暴走族上がりだったのね、バイクで亡くなっちゃうんですが。彼と一緒に買ったという思い出もあるんですね。だから、忘れられない。だから、歴代の筆入れの中にずっと君臨し続けてる音叉です。ちょっと漏れたインクでオレンジ色になっちゃったりとか、色は変わっているんですが、まだ錆びていない。そ

ういう音叉です。

で、最後は歌を歌って終わろうと思うのですが、歌の準備をしながらですけど。なんか、そういえばアラキに聞いておきたいこととかが何かあれば。実際これはどうなのっていうね、何か言っていたらと、今この場で質問すると、質問した一言が、全員のものになるんですね。だから、その質問は非常に貴重なんです。だから、言ってくれるとみんなも嬉しいし、自分も嬉しい。答えられる範囲でお答えしたいなというふうに思います。

じゃあ、準備をしながらですが、もし何かあれば言っていたらと…。

【司会者】：せっかくだから、是非。

【アラキ】：こういう時ね、小学生、いいですね。“どうやって食べているの？”とか言われますからね。“どうやって食べているのって、おまえ箸で食うんだよ”ってかね。なかなか鋭いところを指摘してきますからね。どうやって食べてるのって聞かれたときは、もうさすがにオーッと思いました。

【司会者】：はい、どうぞ。

【参加者1】：先生の写真を見てですね。人とか動物が全然写っていないんですけど、それはわざとか何か、意味があるんですか。

【荒木】：人とか動物も結構撮っているんですね。で、ちょっと今自分で警戒しているのは、場所がアメリカなもので、肖像権っていうのがあるじゃないですか。その確約が取れないんですよ。一つ一つが。それで今ちょっと足踏みしているんです。

怖いんですよ。ちょっとサイトとか出て、それで勝手に使ったとか言って、これが販売されたなんて言った瞬間に裁判になっちゃうという現実を知っているんで、今ちょっと作品としては出せない。だけど、たくさん持っています。

【参加者1】：ありがとうございます。

【参加者2】：ポートランドへいかれたきっかけっていうのは？

【荒木】：めちゃくちゃなんですね。「school of social work」っていう免許が取れる大学を持っている州というのが、何校かしかないんです。日本で一番最初にスクール・ソーシャルワーカーになった山下さんという方がいますが、彼のところでその紹介を受けたんですね。で、西海岸がいいなと思ったら、カリフォルニアとオレゴンだったんです。

それで、オレゴンっていうと、あっ、ポートランド、札幌と姉妹都市じゃないかってね。じゃあオレゴン州にしようって。それから、大学って言ったけど、どこの大学で取れるのか聞いていなかったんですね。もうメチャクチャアバウトです。だけど、行けばなんとかなるだろうと。

その時のアラキの英語の実力は、ゼロです。英語大嫌いだったんでね。勉強なんて一つもしなかったんですね。で、大嫌いで、そのツケが一気に今来ているんですが。でも、なんとなくですね、オレゴン州まで行けばなんとかなるだろうと。

それで、とりあえず友人、そこには800mの世界記録保持者がいてね、その人を頼って。でも行って最初のイミグレーションで。(自分を指差して)怪しいでしょ。捕まりました。

で、別室に連行されて、英語でダァーって言われて、何言っているのか全然分からないんですよ。だから、自分も日本語で“だから俺の日本語分からないでしょ”って。“俺も英語分からないんだよね”って。“だけど俺は、ここに行きたいのっ”みたいな。一時間そのやりとり。今やったら、絶対強制送還ですね。だけど、その時の係の方、一時間後に何て言ったかという、“Good luck”って言ったんですよ。“いや、Good luckは分かるよ”って。それで、“あっ、これは調子出てきたぞ”と思って、“Come on!”って言われてね、“嘉門達夫知ってるよ”とか言ったら無視されてね。それは知らないだろうと思って。なんか黒人のデッカイ警察の方の後ろについて行って。それが初めての旅かな。だから、どこでも良かったんです、ホントに。

そのあと、東の方もまわって、南の方も下りてみて、グルッと動いてみて、やっぱりすごく過ごしやすかったのと、福祉政策が全米ナンバー1なんですね。それから、消費税がない。いいですよ。買い物に消費税がないから、日本に帰って来るとちょっと、おおそうだ、消費税だ、みたいな。すごくキリのいい街です。

まあ、そんな感じで。適当ですね、なんかね。

【司会者】：他に何か。はい。

【参加者3】：自分ことを自分でアラキと言うのは、いつ頃からかとか、何かその辺に自分の気持ちがかもっているとか、何かありますか。

【荒木】：気持ちはこもっていないかなあ。いつからだろう。“自分”はとかってという言い方をしてたんですね、大学では。で、自分がたくさんいても困るなど。みんな“自分は”、“自分は”、って言っているじゃないですか。いや、俺はアラキだよって思った瞬間があって。で、学校の教員やっていましたが、子どもたちに、先生って言われるのが好きじゃなくて、ただ先に生まれただけでね、何なんだっていう気持ちがあったんで、アラキって言わしてまして、みんな、アラキって言って、はいっ！ て腰が低い教員やってたんですけど。

それくらいからかなあ、自分でアラキって言うようになったのは。だから、最後、学校の教員を辞めるときに、おまえは教員じゃないとかって言われたんで、いや俺はアラキだよってね。それから一年半後かな。準備をして辞めたんです。そんな感じですね。

【参加者3】：私は、っていう日本人には受け入れやすいじゃないですか。私は、じゃなくてモロに自分の名前と言うから、なんか私は自分のことベンさんって言っちゃうんで、なんかアラキ、アラキを連発して言うなあっていうのが、すごい印象なんです。ホームページなんかでも、アラキは、アラキは、って言っているんで。その辺かなあと思いながら、聞かせていただきました。

【荒木】：ということは、ホームページ見ちゃったということですね。

【参加者3】：ああ、そうです。愛読者です。

【荒木】：今、このコンピューター動いているじゃないですか。これ奇跡ですよ。この前壊れて動かなくなっちゃって、もう今日どうしようかってね。今年はなんかトラブルがたくさんあってですね、その度に、くじけそうになりながらも、ここに来れたのは皆さんのおかげかなと。

実は、Tグループっていうのがあります。で、今ここに山口先生がおられて、自分は山口先生のTグループですごくお世話になり、Tグループって一回しか経験なくて、そのあとT of Tに行ったんですが、やっぱり一回目はすごく印象にあって、今日はその仲間が何人か来ているんですが、未だにやっぱり思い出すんですね。

それで、1998年の3月22日、そのTグループの会場の清泉寮というところで作った曲があります。確か晶ちゃんとだっけ、いろんな思いがあります。今、この曲が、なんと黒岩静枝さんというジャズの世界では日本で第一人者、今年もその前も、新薬師寺というところでジャズのコンサートをやっちゃったというね。その彼女のところに行って歌を歌わせてもらっているんですが、そこでは、この曲をアラキのいわゆる名刺代わりのジャズにアレンジしていただいているんで、今日はちょっとフォークソングなんですけど、ちょっと育てていきたいなと。いろんな思いが混じって、まあ自分の、最後あと一年で教員を辞めようと思ってかかっていた時期だったんで、いろんな思い出が詰まっています。すごく静かな曲です。

これで今日はたぶん終わっていくと思うんですが、アラキ、いつも思うのが、こうして関わった方たちのその先にある方たちにね、これがどんなふうに響いていくのかって、いつもワクワクしているんですよ。それを確かめに行くこともできないし、どうなっているか分からないんだけど、なにか起きるんじゃないかってね。

だから、常にそういう期待を持って北海道から九州まで動き回っています。で、いろんなことがあるんだけど、自分もね、急に怪我したりだとか、義足壊れて部品交換に行かないとダメだとか、いろいろな条件が重なってくるんで、なかなか時間が作れないんですが、もしチャンスがあれば、またどこかでお話できたらと思います。このあとアラキは明日アメリカに帰りますので、この会場のこの大きな布の向こうにはですね、ボストンバッグが2つあって、これからここで荷造りをやります。

それで、荷造りをやっている間は、アラキと話すチャンスがありますので、どんなものを荷造りしているのかなと見ながらですね、語っていてもいいんじゃないかなと。香港焼きそばとかね、そういうのが入っているのですね、大好きでね。

パチパチ、パチパチ、暖炉の火が燃える。
パチパチ、パチパチ、静かな清里の雪の夜。
パチパチ、パチパチ、人の人の輪ができる。
パチパチ、パチパチ、暖かいね、心までしみるね。
パチパチ、パチパチ、忘れていたものがよみがえる、そんな夜。
火を囲み、今日も一日が明日へ、移り行こうとしている。
それぞれの思いと願いをのせて、今日も暖炉は暖かいよ。

パチパチ、パチパチ、暖炉の火が消える。
パチパチ、パチパチ、静かな別れの時。
パチパチ、パチパチ、人が人が帰ってゆく。
パチパチ、パチパチ、暖かな、思いを胸に。
パチパチ、パチパチ、忘れないさ、いつまでも、この思い。
火を囲み、今日も一日が明日へ、移り行こうとしている。
それぞれの思いと願いをのせて、今日も暖炉は暖かいよ。
忘れないで、その思い。
忘れないよ、君のこと。



思い出しますね。清泉寮にはハンターホールって言うのがあって、そこに暖炉があって、そこに自分の気持ちがあって、少しずつパチパチ燃えていけるような、それでいつまでたってもまだまだって言って。義足ですが100メートルのタイムは12秒5です。全日本チャンピオンです。しばらく走っていないんですが、ぼちぼち来年あたりからマスターズで復帰しようかなって、年齢も40を超えましたんで、本当に落ち着きの無い40歳でしょうがないんですが、普通の大会で現役復帰、100メートルと槍投げって種目で復帰して行こうと思っているのですが、まだまだやれることがあるんじゃないかって。

今回この企画をするために、ここのスタッフの方たちに相当お世話になっていて、アラキ自分で撮ったちゃんとした写真が無いんですね、プロフィールの写真もサングラスをかけていて槍を持っているような、実際槍の練習道具を持ってニコッとして立ってるんですが、あんなのしかなくて、写真選びからご苦労をおかけして立派なものを作っていただき、今日の会場設もお菓子とかわがまま言って、本当に自分が言ったとおりのものを準備していただいたりとか、せっかく来るんだったらたくさん自分の思いが響いていけばいいなと思って、本当にここの方たちに感謝、来た方たちにも感謝、今日も一本で締めたいと思うんで御起立願いますか。



(この後、じゃんけん大会をして、1本締めで終了)